

氏 名	千 葉 洋 平
学 位 の 種 類	博士（文 学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 7591 号
学位授与年月日	平成 28 年 1 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	On Faith in Conduct: The Aesthetic of American Fiction of the 1930s (行為への信念について—1930 年代アメリカの小説における美的なもの)
主 査	筑波大学教 授 博士（文学） 宮本 陽一郎
副 査	筑波大学教 授 文学博士 鷺津 浩子
副 査	筑波大学准教授 博士（文学） 清水 知子
副 査	国土舘大学教授 田代 真

論 文 の 要 旨

本論文は、芸術と政治のつながりが議論の中心に据えられるようになるアメリカ合衆国の 1930 年代に焦点を置き、この時代の文学作品や学問領域編成において、人間の信念と行為の複雑な関係性を紐解くものとして、「美感(the aesthetic)」への関心が高まったことに着目する。本論文で議論の対象として取り扱う作家・知識人たち—John Dos Passos, Ernest Hemingway, James Thurber, Arthur Lovejoy, Robert Merton, Kenneth Burke, Allen Tate—は、複数の言説分野を横断しつつ、観客、誤謬、時間性、メディアといった視点から、社会を射程に入れた新たな時代の美学を模索し構築していた。こうした「美感 the aesthetic」への関心が、従来の美学からは排除されてしまう、人間の信念と行為とのあいだの複雑かつ重層的な部分を構成していたことを、本論文は明らかにする。これを通じ、1930 年代アメリカの文学および学術界におけるこうした議論が、現在の批評理論における最も重要な課題に応える手がかりとなっていると、著者は結論づける。本論文は、序章、結章、および 5 章により構成される。

序章は、1930 年代アメリカ文学に関わる研究史を精査し、そのなかで支配的に用いられてきた、作家・知識人たちの「信念と幻滅」という物語性、そしてそれが不可避免的に導き出す「アートかプロパガンダか」という二分論を同定する。こうした枠組みによる議論は、マッカーシイズムからニュー・レフトに至る、アメリカの批評理論にまで影響を及ぼすものとなった。本論文は、こうした議論のなかで看過されてきた「美的なもの」への関心に目を向ける。1930 年代の言説に領域横断的に現れる美学への関心は、美学を「内的な経験」ととどめるのではなく、より外部に開かれた社会的なものとして捉え直す試みである。

第 1 章「ジョン・ドス・パソス『USA』における情報ジャンルの文化史 (Cultural History of Informational Genres in John Dos Passos' U.S.A.)」では、ドス・パソスの『USA』三部作が、新しいテクノロジーとそれを担う新しい階級を結んでいるだけでなく、そのテクノロジーの形式を転用することで、新しい階級のための新しい「情

報ジャンル」をつくる試みであったことを、ドス・パソスのエッセーや書簡も参照しつつ、明らかにする。情報が氾濫し人間の動機が限定しにくくなる時代にあつては、意図した情報のみならず、その余剰や不足部分によって伝わる意味があることを、ドス・パソスの実験的な手法は実践するものである。

第2章「文明の中間領域—客観性以降のヒューマニズム的科学の挑戦 (Middle Ground in Civilization: The Challenges of Humanizing Science after Objectivity)」は、科学的客観性という概念が今世紀に説得力を失うなかで、新しい学際研究領域として科学史、そしてコミュニケーション研究が立ち上がってきた歴史的な状況を検証する。線的で進歩的な歴史叙述から逸脱するアーサー・ラヴジョイとロバート・マートンの歴史叙述にあつて特異な点は、「時間性 (temporality)」を認識論のなかに組み込む際に、それまで科学や知識とは区別して考えられてきた、感情、誤解、夢、しくじり等の要素を考慮したところにある。とりわけ言葉と言葉の実践のあいだにある意味のずれ—予期されない結果—は、ラヴジョイ、マートン、ケネス・パークの理論のなかで、重要な意味を持つ。

第3章「情報歪曲の声—アーネスト・ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』におけるスペイン市民戦争の新しさ (Voices of Disinformation: Newness of Spanish Civil War in Ernest Hemingway's *For Whom the Bell Tolls*)」は、第2章の議論を踏まえ、『誰がために鐘は鳴る』における内的独白について新解釈を提起するものである。『誰がために鐘は鳴る』は、反ファシズムという作家の政治信条を前提としたうえでこれまで解釈されてきた。しかしヘミングウェイが同時期に映画・戯曲・ジャーナリズムなど異なるメディアを横断しつつ言表していたことは、むしろ知識と信念の境界の危うさである。一見信念と行為が合致しているかのように見える戦場の人々の独白は、むしろ知識と信念とのあいだの解決不能な錯綜を物語るものである。巻末に現れる主人公の内的独白は、全ての合理的な思考を「言い訳」として排除しつつ、暴力という行為を迫る声へと変容する。この声こそが戦争の本質であることを、ヘミングウェイのテキストは明らかにする。

第4章「笑いの物理学—ジェイムズ・サーバーの喜劇的手法 (The Physics of Laughter: Comic Methods in James Thurber)」は、サーバーのコメディが、非合理性や合理性自体の不在を合理的に捉えることを可能にするものであることを明らかにする。予期したことが別の予期しない結果を生み出すことの連鎖が、サーバーの喜劇性の核心にある。サーバーは、登場人物の予期と失敗、話と教訓、そして話同士の関係にギャップを混ぜることで、特定の原則や教義による連帯を促すのではなく、どの行為の結果も誤る可能性があることを暗示する。むしろ人間には誤謬性と有限性があるからこそ、そこに人と人を結ぶ紐帯がある。

第5章「文芸批評における中間の美学—共働の戦略としてのクローズ・リーディング (Aesthetics of Medium in Literary Criticism: Close Reading as a Collaborative Strategy)」では、文芸批評家アレン・テイトとケネス・パークとの比較を通じ、1930年代における文芸批評に底流するものを明らかにする。テイトが最も強く批判するのは、文学研究に科学的学問の枠がはめられ、アレゴリー的情報の抽出のみが主眼となることである。意味伝達の成功の側面だけではなく、その失敗やずれを捉えなければ「詩的知識」は得られないとテイトは主張する。同様にパークは、いかなる解釈の枠組みにも解釈から抜け落ちるものがあり、そうした「解釈の副産物」こそが、解釈の変化を促す要素となることを明らかにする。

結章は、本論文が以下の点を明らかにしえたことを確認する。1) 1930年代アメリカ文学・文化における「美的なもの」への関心は、「社会的なもの」と接点をもつような「美学」を再構成するものであった。2) 本論文で取り上げた諸テキストは、人間の誤謬性・時間性・有限性を踏まえ、信念と行為のギャップを知覚する理論モデルや物語を構築するものである。以上に基づき、「歴史を美感化 (Aesthetize History)」するプロセスを解明することは、1930年代という二つの大戦間の不穏な時代の言説を、共時的かつ通時的な視野で解明し、それを文学批評の歴史に再定位するものであると、結論づける。

審 査 の 要 旨

1 批評

美学がいかに政治を隠蔽してきたかを暴くというアプローチは、これまでの 1930 年代に関する研究の主流であるのみならず、ポスト構造主義の批評理論の系譜を支配するものでもあった。本論文はこうしたアプローチに真っ向から挑戦し、政治性に先立って存在する「美的なもの (the Aesthetic)」—信念と行為とのあいだの錯綜した関係性—に注目し、「美的なもの」への関心こそが 1930 年代の言説の核心であることを解明する。このきわめて挑戦的な立論を、入念なテキスト分析と重厚な論述によって完遂しているという点において、本論文は画期的な意義を持つものである。

20 世紀の批評理論の展開を驚くべき明晰さで分析し、そのなかで本論文の試みの意義を明解にする序章は、特に高い評価に値する。これは批評理論についての膨大な知識をもってして初めて可能な論述と言える。序章で確立された理論的枠組みの確かさが、すべての章の分析に力を与えている。

アーネスト・ヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』を分析した第 3 章は、その最も際立った成果と言える。すでに論じ尽くされた観のあるこの作品をとりあげ、著者はまったく新しい解釈を提起している。作品を締めくくる主人公の内的独白に、知識と信念そして信念と行為とのあいだの境界の揺らぎを読み取る本論文の解釈は、今後の同作品の解釈のなかで、決定的な論考として参照されるべき価値を有するものである。

難解なケネス・バークの理論を十分に咀嚼したうえで、それを 1930 年代の言説群のなかの核心として定位させた第 5 章の議論も、1930 年代アメリカ文学研究に新たな展望を開くものであり、これは本論文の大きな成果として評価に値する。ケネス・バークの言語理論についての研究はすでに豊富にあるものの、1930 年代アメリカ文学研究のなかに、バークの論考を説得力のあるかたちで位置づけることに成功した例は、きわめて稀である。

壮大な企図をもつ論文であるだけに、さらに望むべき点もある。第 2 章のドス・パソス論と第 4 章のサーバー論は、全体の議論の流れのなかでは十分にその役割を果たしているが、個々の作家に関する分析としては、さらに多面的なアプローチが望まれる。またそれが行われれば、間違いなくより豊かな成果を導き出すことができるだろう。同時に本論文の提起する議論からすれば、プロパガンダに関する 1930 年代の学術研究における言説の分析は強く望まれるところであるし、テキストと写真を用いたメディア横断的な作品群、そして映画も、是非とも分析対象に含めたいところである。

以上のような問題点は、本論文の画期的な意義を減ずるものではなく、むしろそれゆえに期待される課題である。

2 最終試験

平成 27 年 11 月 14 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。